

## 黙示録 11 : 1-14

「救いをもたらすふたりの証人の死」

11:1 それから、私に杖のような測りざおが与えられた。すると、こう言う者があった。「立って、神の聖所と祭壇と、また、そこで礼拝している人を測れ。 11:2 聖所の外の庭は、異邦人に与えられているゆえ、そのままに差し置きなさい。測ってはいけない。彼らは聖なる都を四十二か月の間踏みにじる。 11:3 それから、わたしがわたしのふたりの証人に許すと、彼らは荒布を着て千二百六十日の間預言する。」 11:4 彼らは全地の主の御前にある二本のオリーブの木、また二つの燭台である。 11:5 彼らに害を加えようとする者があれば、火が彼らの口から出て、敵を滅ぼし尽くす。彼らに害を加えようとする者があれば、必ずこのように殺される。 11:6 この人たちは、預言をしている期間は雨が降らないように天を閉じる力を持っており、また、水を血に変え、そのうえ、思うままに、何度でも、あらゆる災害をもって地を打つ力を持っている。 11:7 そして彼らがあかしを終えると、底知れぬ所から上って来る獣が、彼らと戦って勝ち、彼らを殺す。 11:8 彼らの死体は、霊的な理解ではソドムやエジプトと呼ばれる大きな都の大通りにさらされる。彼らの主もその都で十字架につけられたのである。 11:9 もろもろの民族、部族、国語、国民に属する人々が、三日半の間、彼らの死体をながめていて、その死体を墓に納めることを許さない。 11:10 また地に住む人々は、彼らのことで喜び祝って、互いに贈り物を贈り合う。それは、このふたりの預言者が、地に住む人々を苦しめたからである。 11:11 しかし、三日半の後、神から出たいのちの息が、彼らに入り、彼らが足で立ち上がったので、それを見ていた人々は非常な恐怖に襲われた。 11:12 そのときふたりは、天から大きな声がして、「ここに上れ」と言うのを聞いた。そこで、彼らは雲に乗って天に上った。彼らの敵はそれを見た。 11:13 そのとき、大地震が起こって、都の十分の一が倒れた。この地震のため七千人が死に、生き残った人々は、恐怖に満たされ、天の神をあがめた。 11:14 第二のわざわいは過ぎ去った。見よ。第三のわざわいがすぐに来る。

導入

黙示録 11 章はおもにふたりの証人についてです。この証人たちは、地上で特別な使命を果たすために天から遣わされます。

ふたりは、1260 日間預言します。これは、約 3 年半です。

その後、この証人たちは殺されて、その遺体は埋葬されずにエルサレムの路上に放置されます。

すると、彼らが死んだことを誰もが喜び祝います。

しかし、3 日半後に、彼らの遺体が生き返ります。

人々はこの驚くような出来事を目撃します。

テレビ中継や動画サイトで世界中の人々がこの光景を目にするでしょう。

ふたりが復活すると同時に、エルサレムでは地震が起こって 7000 人の死者が出ます。

地震で生き残った人々は、悔い改めて神をあがめます。

現在のエルサレムの人口を当てはめると、一日で 80 万人の人が救われることになります。

今日はわかりやすく説明するために、このふたりの証人に関する 3 つの質問に答えるかたちで話を進めていきます。

1. ふたりの証人は誰なのか。
2. ふたりはなぜやってきたのか。
3. ふたりの 3 年半の働きの結果どうなったか。

この 3 つの質問に答え始める前に、11 章 1-2 節をご覧ください。

ヨハネは、杖のような測りざおを渡され、神の聖所と祭壇とそこで礼拝している人々を測るよう御使いから命じられました。

しかし、聖所の外の庭は測らないようにと言われました。

その理由は、聖なる都を 42 カ月間 (3 年半) 踏みにじる異邦人に聖所の外の庭が与えられているからです。

これは一体どういうことでしょう。  
何かを測るという描写は、預言者たちの幻によく登場します。  
エゼキエルやゼカリヤ、アモス書にもあります。  
では、エゼキエル 40 : 3-6 を読みましょう。

40:3 主が私をそこに連れて行かれると、そこに、ひとりの人がいた。その姿は青銅でできているようであり、その手に麻のひもと測りざおとを持って門のところに立っていた。 40:4 その人は私に話しかけた。「人の子よ。あなたの目で見、耳で聞き、わたしがあなたに見せるすべての事を心に留めよ。わたしがあなたを連れて来たのは、あなたにこれを見せるためだ。あなたが見ることをみな、イスラエルの家に告げよ。」 40:5 そこに、神殿の外側を巡って取り囲んでいる壁があった。その人は手に六キュビトの測りざおを持っていた。その一キュビトは、普通の一キュビトに一手幅を足した長さであった。彼がその外壁の厚さを測ると、一さおであり、その高さも一さおであった。 40:6 それから、彼が東向きの門に行き、その階段を上って、門の敷居を測ると、その幅は一さおで、もう一つの門の敷居も幅は一さおであった。

#### ゼカリヤ 2 : 1-2

2:1 私が目を上げて見ると、なんと、ひとりの人がいて、その手に一本の測り綱があった。 2:2 私がその人に、「あなたはどこへ行かれるのですか」と尋ねると、彼は答えた。「エルサレムを測りに行く。その幅と長さがどれほどあるかを見るために。」

測るというコンセプトは、いくつかのことを描くために用いられます。  
まず、何かを建て上げたり建てなおしたりする備えとして用いられます。  
一方、破壊の備えとして用いられる場合もあります。  
しかし、今日の個所では、守りを意味して用いられています。

これは、7章 2-3 節に登場した印と似ています。

印を押すことと測ることはどちらも、悪魔の引き起こす恐怖が地上におよぶときに備えて、神に忠実な人々を守るためになされます。

ここにひとつの問題があります。ヨハネがこれらの啓示を受けたとき、エルサレムの神殿はすでに破壊されていました。それ以降、神殿は再建されていません。

ですから、この預言を文字通りに受け取るなら、エルサレムの神殿はいつかの時点で再建されなければなりません。

実は、これを実現するための財源はすでに確保されており、再建計画も資材も準備されています。ただし、大きな問題がひとつあります。それは、神殿のあった場所には現在、イスラム教の「岩のドーム」が建っていることです。ここはイスラム教徒の聖地であり、預言者ムハンマドが一夜のうちに昇天した場所とされています。

かつての神殿をまったく同じ規模で再建しようとするれば、このイスラム教のモスクが破壊されるか、移転しなければなりません。

そうなれば、大問題になるでしょう。

けれども、イスラエル新聞は先ごろ、次のように発表しています。

イスラエルの主要なユダヤ教指導者たちは、アメリカのトランプ大統領やロシアのプーチン大統領が、ユダヤ人による 2500 年前のエルサレム神殿再建を援助したペルシャのクロス王の再来だと考えています。

古代のユダヤ教の宗教的自治組織を再興させようと試みる最高法院という団体があります。そのスポークスマンであるラビ・ヒレル・ワイズ博士は、イスラエル・ナショナル・ニュースの取材に次のようにコメントしました。

「現在、ユダヤ人がエルサレムを霊的に受け継いでいることを世界二大大国の元首たちが認めています。これは、歴史上例のない状況です。」

最高法院は、すべての人類に益をもたらす計画を遂行するために、米露が協力するようトランプ、プーチン両大統領に嘆願書を送りました。その計画とは、熾烈な戦いのあるエルサレムの神殿の丘に聖なる神殿を再建することです。

いつか遠い将来 NHK のニュースを見ていて、エルサレムの神殿が元の場所に再建され始めたというニュースを聞いたなら、あらゆる問題が起こることを覚悟してください。イエスの再臨はそう遠くはないでしょう。また、携挙も近いはずで。

では、先ほど挙げた 3 つの質問にひとつずつ答えていきましょう。

### 1. このふたりの証人たちは誰なのか。

このふたりの証人たちの正体については、聖書学者の間でおもにふたつの見解があります。ひとつはモーセとエノクで、もうひとつはモーセとエリヤです。

私は個人的に、これはモーセとエリヤだと考えます。

そう考える根拠は 6 節に含まれるみことばです。

6 節がそこにあるのには理由があります。私はそれが、このふたりの証人の正体を明かすためだと考えています。

6 節には、ふたりが預言する 1260 日間は雨が降らないように天を閉じる力を彼らが持っている」と記されています。

また、水を血に変えたり、思うままに何度でもあらゆる災害で地を打ったりする力を持っている」とあります。

聖書全巻を読んだことがある人なら、これらの説明にもっともあてはまるのはモーセとエリヤだとわかります。

では、旧約聖書のいくつかの箇所を読んで、彼らの生きていたころの様子を見てみましょう。

### 1. モーセ（出エジプト 7 : 14-17）

7:14 【主】はモーセに仰せられた。「パロの心は強情で、民を行かせることを拒んでいる。 7:15 あなたは朝、パロのところへ行け。見よ。彼は水のところに出て来る。あなたはナイルの岸に立って彼を迎えよ。そして、蛇に変わったあの杖を手にとって、 7:16 彼に言わなければならない。へブル人の神、【主】が私をあなたに遣わして仰せられます。『わたしの民を行かせ、彼らに、荒野でわたしに仕えさせよ。』ああ、しかし、あなたは今までお聞きになりませんでした。 7:17 【主】はこう仰せられます。『あなたは、次のことによって、わたしが【主】であることを知るようになる。』ご覧ください。私は手に持っている杖でナイルの水を打ちます。水は血に変わり、

これは、モーセがエジプトに警告した最初の裁きです。12 章まで読み進めると、その後モーセがエジプトにさらなるわざわいをもたらし、最後にはすべての長子が死ぬこととなります。

水を血に変え、地上に災害をもたらすことと直接関連付けられているのは、聖書の中で唯一モーセだけです。

### 2. エリヤ

列王記第一 17:1 ギルアデのティシュベの出のティシュベ人エリヤはアハブに言った。「私の仕えているイスラエルの神、【主】は生きておられる。私のことばによらなければ、ここ二、三年の間は露も雨も降らないであろう。」

列王記第一 18 : 41-46

18:41 それから、エリヤはアハブに言った。「上って行って飲み食いしなさい。激しい大雨の音がするから。」 18:42 そこで、アハブは飲み食いするために上って行った。エ

リヤはカルメル山の頂上に登り、地にひざまずいて自分の顔をひざの間にうずめた。  
**18:43** それから、彼は若い者に言った。「さあ、上って行って、海のほうを見てくれ。」若い者は上って、見て来て、「何もありません」と言った。すると、エリヤが言った。「七たびくり返しなさい。」 **18:44** 七度目に彼は、「あれ。人の手のひらほどの小さな雲が海から上っています」と言った。それでエリヤは言った。「上って行って、アハブに言いなさい。『大雨に閉じ込められないうちに、車を整えて下って行きなさい。』」 **18:45** しばらくすると、空は濃い雲と風で暗くなり、やがて激しい大雨となった。アハブは車に乗ってイズレエルへ行った。 **18:46** 【主】の手がエリヤの上に乗ったので、彼は腰をからげてイズレエルの入口までアハブの前を走って行った。

エリヤの人生に起こったこれらの出来事は、黙示録 11 章 6 節と直接関連があります。昨年 の 9 月に黙示録の学びを始めた際にも皆さんにお伝えしましたが、黙示録を正しく理解するには旧約聖書の知識が必要です。

とくに、エゼキエル書は黙示録を理解するために重要な書となります。

次の問いに進む前に、4 節に注目してください。

そこには、彼らが二本のオリーブの木と二つの燭台であると記されています。

これについて言及しているゼカリヤの預言を読む必要があります。

では、ゼカリヤ 4 : 11-14 を読みましょう。

**4:11** 私はまた、彼に尋ねて言った。「燭台の右左にある、この二本のオリーブの木は何ですか。」 **4:12** 私は再び尋ねて言った。「二本の金の管によって油をそそぎ出すこのオリーブの二本の枝は何ですか。」 **4:13** すると彼は、私にこう言った。「あなたは、これらが何か知らないのか。」私は言った。「主よ。知りません。」 **4:14** 彼は言った。「これらは、全地の主のそばに立つ、ふたりの油そそがれた者だ。」

ゼカリヤは、このふたりの証人がモーセとエリヤだとは断定していませんが、全知の主のそばに立つ「油注がれた者」と明言しています。

ここで確かなのは、イエスの再臨が起こるずっと前から神はこれを計画なさっていたことです。そして、ご自身の民をとおして啓示されたこれらの出来事は必ず成就なさることです。

## **2. ふたりの証人はなぜやって来たのか。**

大患難時代に神が地上にふたりの証人をわざわざ遣わされたのはなぜか不思議に思えるかもしれません。この時代に地上に福音をもたらすためには、7 章に登場した印を押されたユダヤ人が 14 万 4000 人もいるではありませんか。

ではなぜ、わざわざふたりの証人は遣わされたのでしょうか。

その答えは、9 節にあると考えます。

9 節を読みましょう。

**11:9** もろもろの民族、部族、国語、国民に属する人々が、三日半の間、彼らの死体をながめていて、その死体を墓に納めることを許さない。

このふたりの証人が死んだとき、その遺体を全世界の人々が見ることができるようです。おそらくこの時点では、すでに福音の知らせが全世界の人々に届いているはずですが。

現代では、インターネットの普及により、世界中の人々がパソコンやスマホなどのデバイスをとおして、世界のどこかで起きた出来事を見ることができます。このようなことが可能になったのは、私たちの時代が初めてです。

砂漠やジャングルに住む人たちも、今ではスマホを持っています。

世界中のすべての人に同時に姿を見られる、声を聞かれるということは、今までの時代にはなかったことです。

将来、世界中のすべての人がスマホを持っていてネットにアクセスできるようになるというのはそれほど現実離れした話ではありません。

このみことばから、ふたりの証人は世界に証するために来たことは明らかです。

それは、この世がイエス・キリストについての福音のメッセージを聞く最後のチャンスです。

誰もがこのふたりの証人を見て、その言葉を聞くことができます。

福音が紹介されるだけでなく、ふたりの人が死からよみがえる姿も世界中が見るのです。

ですから、このふたりの証人が来た目的は、神がこの世に最後のチャンスを与えるためのようです。16章以降に記されている神の御怒りの7つの鉢が注がれる前に与えられた最後のチャンスです。

### 3. ふたりの働きの結果。

その答えは、13節に記されています。

**11:13** そのとき、大地震が起こって、都の十分の一が倒れた。この地震のため七千人が死に、生き残った人々は、恐怖に満たされ、天の神をあがめた。

エルサレムで7000人の人々が死にますが、生き残った人々は天の神に栄光をもたらしました。

神に栄光をもたらす唯一の方法は、悔い改めです。

ですから、エルサレムに住んでいた残りのユダヤ人は皆、自らの罪を悔い改めるのです。つまり、ふたりの証人が復活して天に昇った後、その働きの結果、約80万人の人々が一日で救われるのです。

エルサレムのユダヤ人に福音が初めて告げ知らされた時、3000人の人たちが救われました。これは、使徒2:41に記されています。

**2:41** そこで、彼のことばを受け入れた者は、バプテスマを受けた。その日、三千人ほどが弟子に加えられた。

そして、最後にエルサレムで福音が告げ知らされ、復活が起こるとき、はるかに多くの人々が救われます。

何人かはわかりませんが、現在のエルサレムの人口を当てはめて考えるなら、約80万人です。

この個所のもっともすばらしいところは、ふたりの証人たちが犠牲として死に、神がふたりの正しさを証明してくださることにより、信じていなかったユダヤ人がイエス・キリストを信じるようになることです。

そのようなことは、もうその後にはないでしょう。

悪が打ち負かされ、人々がイエスのものとされなければなりません。しかしそれは、能力や権力によってではなく、イエス・キリストの死と復活という証をとおして働かれる聖霊によってなされるのです。

福音のメッセージに力があるのです。私たちは、今生きている邪悪な世の中にこのメッセージを伝え続けなくてはなりません。

最後に、ローマ1:16-17を読みましょう。

**1:16** 私は福音を恥とは思いません。福音は、ユダヤ人をはじめギリシヤ人にも、信じるすべての人にとって、救いを得させる神の力です。**1:17** なぜなら、福音のうちには神の義が啓示されていて、その義は、信仰に始まり信仰に進ませるからです。「義人は信仰によって生きる」と書いてあるとおりです。